



茶番
九
名

2132
99



99
止

2132
911止

茶むん狂言正本

安名手本執心廓

第四編下の巻

郷食庭文庫

郷食庭文庫

156
止

安名手本執心廓四編下

化粧室

東海志づくふして房隠の遠山雲分ら
たれ青毛後眉垂小似らやしく引まも
毛の黒くともさるる雨雲子とるるま
関前の砂裡も幼雲の厚化粧ふらまくと
あうとをらむらうていろは八卦をえんた妓
女あればその尻ふりたれくニさがり

ひくもありまんとありてかく色男へのふ
こさふがく書あきたんぬそふらんづ
くで三吟の附合をよるごとくトくどり
く去らういぢやめて書みむしん
のふらみありおのがさめくその女した
とら書後の書のみづれのとらうら
びんがりのつめ
びんがりのつめ
ヨ合まはむらうら物だ
のらうら物だ

其の末にやういふお春のいのちをうけく
 しろそのうぬそよてエげエる井戸たまたまう旅
 不ぞ人なふまふとせるからあーいふおのつこ
 馬なつていへくまなうらうらう腹なるとておの
 ちとごう連麻をみるやうお屍のおのい女た
 ぞらふからあてまのまをいふうでまへく
 さんぞらふお場のあふお坂で果てからうら
 子子虫がまひ〜トびくおおむかへるおびく

のおのうしよのいのちをくそんるおさぬ〜ともま
 へん〜おああるお船をさんふらつてけるせ
 出ま〜しらすうらうたうらそよ〜そその
 つねのん〜お入りのおあうらお田前おやつ
 ておんが〜お〜おま〜おのめ〜おるま
 中〜おの金〜おの〜おの〜おの〜おの〜おの
 ちか〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お

のまき籍はさんのもろろくさか喰くつて中ちゆうらふふけ
 類るいをまきの酒しゆ虫むし齒をがいらうごぶ石いしをまき平へい
 中ちゆう齒ををやあるぬ人や種たねるをまきろろ酒しゆをまき
 かんみぬけたる入い齒ををまきろろへくあつて
 平へいコ、鈴すずが木き林りんぶ馬うまの齒をでもひろりて来き
 て中ちゆうろろ酒しゆをぬへさんへ穢あつ多たと心こころ中ちゆうまき
 あるいよまきと久く平へいそふはぐろりいろうまき
 らむのび酒しゆはろろろろろろ齒をがらむむのめ

廿七

ろろあもいさんいららまきよしあありそ
 あねものご子こ平へいとあうも糸いと工く品ひん川の女をんなは
 うら先まへへまきるをまき酒しゆアい志しまきことと品ひん川がわ
 の品ひんとら字じの口くちをまき川がわかくろろはもろろ
 そふるりのま平へいごうせと物もの志しりのまきま
 の師し通とらんふるれららは内うちのあつての平へい
 コウその茶ちや碗わんを石いしてまきろろこれろのま
 糸いと工くと虫むしごどろらんるまき糸いと工く酒しゆ千ちツト

廿八

こゝろは坊子中ぢゆうぢゆうの事であらうけさうやういふの事をして
 てめえがそれをしててもう一原の女帝のまて
 らうやういふの事をしていふの事をしていふ
 弟わうの事をいふ女は金銀の事かきくはる
 ぶらうらうおとどろくまの女小唄こゝろの徳の男
 をいふたぐいおせう衣布いふの金銀をいふ
 やあうく内志うちやうのかアやお徳おとくづいへま
 じいせうい来きのぶらうらうあえ人足ひとあしがちがは

アいぬエまーひいこまへらうて舞まへる
 そと **酒** うんまーておんるん **平** いやんエトあ
 けけるまゝいふまゝいふまゝいふまゝ
 るまゝいふまゝいふまゝいふまゝ
 三言さんごん せいせいせいせいせいせい
 つけるまゝいふまゝいふまゝいふまゝ
 自みづからいふまゝいふまゝいふまゝ
 らうまゝいふまゝいふまゝいふまゝ
 んせんらうやういふ私わたしも花街はなまちふあつ時ときの仲なつの町
 もせんらういふのでありまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

れ不^レ也^レも^レい^レふ^レく^レし^レ倒^レれ^レく^レ身^レを
ま^レて^レま^レづ^レく^レ年^レも^レぐ^レこ^レん^レ身^レち^レら^レで^レお
る^レの^レ品^レ川^レの^レを^レそ^レぞ^レあ^レぐ^レれて^レ西^レも^レ東^レも^レあ^レら
ま^レく^レあ^レく^レ今^レの^レ世^レの^レよ^レい^レあ^レを^レそ^レぞ^レあ^レも^レい^レ
入^レら^レん^レあ^レら^レう^レぞ^レ身^レの上^レを^レそ^レぞ^レあ^レた
ら^レあ^レら^レお^レり^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
ん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
そ^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ

廿四

んせうが^レら^レう^レま^レら^レう^レあ^レら^レう^レ初^レ金^レか^レ
な^レか^レな^レと^レあ^レを^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
う^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
あ^レら^レお^レり^レあ^レら^レう^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
ら^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
ふ^レけ^レふ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
上^レで^レ身^レの上^レを^レそ^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ
あ^レら^レて^レ又^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レぞ^レあ^レら^レん^レ

廿三

夕一志やアあるんはとめ入せぬひいしたそ
 れへそよせとそ一う鞍くらぐ久ひ出でるおじりの新しん
 造ぞう亮りやうせ一ッつちもそでみ車くるまさんをあぐらを造ぞう務む工こう
 中ちゆううふひひひひ一い志しををけけののかかららががああららわわれれて
 そそここどど内ない徳とくでで茶ちや屋や亮りやうやや家いへのの名な代しろ子こかか
 りりととどどせせららひひくくけけ鞍くら久ひ志しくく一い芝しばちちううくくの
 小こ川がわるるれればば車くるまさんをああららわわッつくくととくく来きももせ
 ううととそそれれもも苦く勞らうふふるるののいいせせ
トモも一もいふ
一屏風のそとより

廿九

其そののおお嘲ちやう亭てい亭ていののああままさんさん久く 油アイアイそそふふここゆ
 つついいののがが遺いつつふふををくくそそへへおおももれれるる一一 油
 ささぞぞゆゆ一一つつちちははううせせ一一かかららうう祐すけ工こうとと何なにら
 ももううとと一一んん ト女にょ二に人にんややくく男おとこ夫つまををととりりももたた 油
と二に井い寺じののららいいととううああままりりのの粘ねりののああまま
ひををととりりととくくととるる一一 油折をり一一もも茶ちや屋やのの男おとこ勤けん美み強かうつつとと
来りりおお中ちゆうととううああままををととりり一一 油たたううととううつつびびややううぶぶああけけお
供ををつつととううたたととううははおおももれれるるももああちちののここちちああせ
島入いりののああいいここららおおももれれるる一一 油ととううととうう 油おおいいららん
 ぞぞううちちああままををととりり 油 油ごごふふおおららんんののああままををせせぬ
 おおももれれはは盛せいでであありり 油 油又また世よ界かいががかかららいいて
油

四一

もみせもす子 **お** おくるさんへ 傍におふさだぶね
あ んご子 勘さんうへ まらうい 世果がかりつ
くちちちせも まさんい ぶねもす女やうと
品川もでまごつらせればゆい へるんめせやうであ
りませう **勘** マア志づうふあろ婦ま 喧花不
やア後エ二人りるう 膝を切てまうふ人金ハ後エの
かどまうあぶらうのぶううる 魂香のまぶんで
死ぶめのう 徳生うい おりてくれい **お** い

四十

つそかあういことあひるんまさやうとて
ニタあうぬるううみ 綱をさげてもそりま
ユ風におとせん **勘** るんまうい まうあやいこれ
ぬがけえとらうい の庭ううとこの 鍵を後い
切く梅(お)りちやア どうでいせ入ませうとて
ひえ夜へはぐててあるあぶんでありますせ
トまねてまうい あまもろふも 其はつらうと
あうくせうくくるあふお 勘屋かまをかり

四十

江戸 東西散人戲作

茶番 安名手本執心廓 初編二冊

全二編三編四編 各二冊 全部八冊

文政十年史夏新鶴

筆研萬福大吉利市

市義

